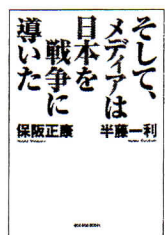


# マスコミ

自民党・第一  
次安倍政権が  
「特定秘密保護  
法案」を強行に  
進める中、かつ  
と課題を指摘している。両  
書に共通するのは「平和の  
ための表現の自由」である。  
そのためジャーナリス  
ム、マス・メディア、メデ  
ィアがなすことのひとつ  
は、これまで自ら歩んでき  
た道をきちんと学ぶこと、  
そして今、将来にわたりに  
すべきことを熟慮する必要  
がある。

昭和史の第一人者である  
保阪正康と半藤一利『そし  
て、メディアは日本を戦争  
に導いた』(東洋経済新報  
社)は、「言論の自由・出  
版の自由が権力者をあらぬ  
ほうに走らせなかったため  
重要なこと」(半藤)と言  
い切る。そのうえで、ジャ  
ーナリストの力量不足、ジ  
ャーナリズム力の衰えを危  
惧する。  
山田健太『言論の自由  
拡大するメディアと縮むジ  
ャーナリズム』(叢書現代  
社会とフロンティア、ミネ



2013/12/20  
No.3020 p.8

## 将来にわたりなすべき ことを熟慮する必要が

鈴木 雄 雅

NHK社会部記者出身の  
池上彰がその原点というべ  
き教科書、小和田次郎『日  
スク日記』が『原寿雄自撰  
デスク日記』一九六三〜六  
八』として弓立社から復刊  
された。原が共同通信社社  
会部デスク時代に書かれた  
ものだ。ジャーナリストは  
歴史の証言者を具現化した  
良書である。解題を書かれ  
た藤森研・専修大学教授  
(元朝日新聞記者)、そして  
同書の復刊に尽力された  
小俣一平はこれまでも  
調査報道をテーマにした著  
作を世に繰り出してきた方

「戦前・戦中期」の刊行が  
待たれる。これらに日外ア  
ソシエーツ編集部(編)『日  
本ジャーナリズム・報道史  
事典』トピックス1861  
―2011』(日外アソシ  
エーツ)を加えたい。ジャ  
ーナリズムを目指す学生に  
限らず、記録をつづるとい  
う側面でもジャーナリズムと  
は何かを考える示唆を与え  
てくれるだろう  
さて、今年は岩波書店創  
業百年にあたり、『物語岩  
波書店百年史』が刊行され  
た。「教養」の誕生(紅野  
謙介)、「教育」の時代(佐  
藤卓也)、「戦後」から離

れて(刈部直)の三部作(本  
紙8月9日号特集)。一般  
読者向けの物語スタイルな  
ので読みやすい。  
「岩波文化」という言葉  
を生み出したその出版活動  
は戦前、戦後の日本社会を  
国民国家、日本に仕上げる  
仕組みを作ったとも言え  
る。講談社文化、岩波文化  
そしてその延長線上にこれ  
からの日本社会があるとは  
思えないが、どうやら日本  
人は「総力戦体制」を好む  
ジャーナリストらの苦悩  
は米国でも同様である。名  
門『ワシントン・ポスト』  
がアマゾンの創業者に売却  
され、サイバースペースの  
ニュースサイトが次世代の  
主役になる波がさらに大き  
くなる中で、大治朋子『ア  
メリカ・メディア・ウォー  
ズ』(講談社現代新書)が  
米メディア界再編を伝える  
とともに、彼らが「地図の  
ない旅」をしながらも挑戦  
し続ける姿を描いている。  
人々がマス・メディアか  
らメディアによる情報環境  
にさらされるようになる  
とはたして何が変わり(代  
わり)、何が変わらない(代  
わらない)のであろうか。  
(すすき・ゆうが氏)上智  
大学文学部教授・新聞学専  
攻

作を世に繰り出してきた方  
藤卓也)、「戦後」から離